

令和5年度 富山県スポーツ推進審議会議事録

1 日 時 令和6年3月21日(木) 15時00分～16時40分

2 会 場 富山県民会館 611号室

3 出席者

- (1) 委 員 荒谷委員、池田委員、大橋委員、金委員、紙谷委員、北田委員、近藤委員、
笹川委員、竹内委員、坪内委員、東瀬委員(木倉県スポ協普及強化部長)、
中村委員、堀田委員、三角委員、安井委員、山木委員、山田委員
- (2) 事務局 広島生活環境文化部長、杉田次長、島谷参事・スポーツ振興課長、
大島保健体育課長
スポーツ振興課職員
- (3) 県出席者 生涯学習・文化財室長(班長)、障害福祉課長(課長補佐)、
高齢福祉課長(課長補佐)、健康課長
※()は代理出席者

4 次 第

(1) 開 会

(2) 広島生活環境文化部長 挨拶

(3) 委員紹介

(4) 役員選出

出席委員が堀田委員を会長、東瀬委員を副会長に推薦 →承認

(5) 議 事

①報告事項

令和5年度スポーツ推進施策の取組状況及び令和6年度スポーツ関係予算について

基本施策1 県民がスポーツに親しむことができる環境の充実

基本施策2 たくましい子どもの育成と学校体育・スポーツの充実

基本施策3 全国や世界の檜舞台で活躍できる選手の育成

基本施策4 スポーツを支える人材の育成と活用

基本施策5 スポーツを通じた地域の活性化

令和6年度スポーツ関係予算の概要

【概要説明】 島谷参事・スポーツ振興課長

【質疑応答】【◎は議長(会長)、○は委員意見及び質問要旨、◆は事務局説明】

- ◎ 9月24日に行われたEnjoy!スポーツとやまは新しい試みか。
- ◆ 今年度の新規事業としての取組みである。
- ◎ 富山県内の総合型地域スポーツクラブの発表や活動紹介のパネルがあったと思うが、実際どれぐらい参加したのか。
- ◆ 約20クラブである。
- ◎ 以前は、総合型地域スポーツクラブが各地区でスポレク交流大会としていろいろなイベントを行っていたが、それはどうなったのか。
- ◆ これまで県内4地区で、イベントをやっていたが、それをこの事業（Enjoy!スポーツとやま）に集約した形となっている。

② 諮問「県のスポーツプランの改定について」

富山県知事並びに富山県教育委員会から富山県スポーツ推進審議会に対して県のスポーツプランの改定について諮問

③ 審議事項

本県スポーツ振興と課題及びスポーツプラン改定スケジュールについて

【概要説明】 島谷参事・スポーツ振興課長

【質疑応答】 【◎は議長（会長）、○は委員意見及び質問要旨、◆は事務局説明】

- ◎ 今後の富山県が目指すべきスポーツ振興の方向性や具体的方策等について、それぞれの立場から、自由にご意見を伺いたい。
- ◎ 基本施策の5本の柱で資料はまとめられているが、改定についてもこの形で進めていくのか。
- ◆ 今のプランにおいては5本の柱で進めているが、改定に向けては、決してこの柱に縛られることはない。新たな柱が立つ可能性もあるし、柱が違う形に変わることもあると考えている。
- ◎ 県民がスポーツに親しむことができる環境の充実ということで、富山マラソンや障害者スポーツなどあるが、今後の課題と取り組みとして、スポーツ実施率の低い働き盛りや子育て世代に対して、どのようにして運動してもらおうかだが、シニアに関する記述がないところがちょっと気になった。人口の比率からいうと高齢者が多く、実際にはシニアスポーツは結構盛んである。生涯スポーツという立場からの意見はないか。

- 私は、ママさんバレーが専門だが、参加者は高齢者が目立つ。連盟の立ち上げ当時からメンバーでずっと変わっていない。シニアの方が元気いっぱい、50歳代、60歳代、70歳代の各年代で全国大会が開かれている。しかし、その反面、学校では生徒数の減少により、昔は必ずあった野球とバレーの部活動がなくなっている学校もあり、元気なシニア世代の下の、子育て・働き盛り世代のメンバーが抜けているため、下（の年齢層）から全然育ってこないことが悩みである。
- 私はバドミントンなのだが、シニアの方はシニア連盟などをつくり、一生懸命に頑張っている。バドミントン関係でも、若い人の加入率が全くないということで、組織に入らず、自分たちで楽しんでいることが問題だ。今後の組織運営として、若い人たちをどのように組織に取り込んでいくかが、どの組織（種目）でも共通の悩みではないか。
- 総合型地域スポーツクラブでは、会員は受益者負担で、自分のスポーツを楽しんでいる。年齢的には、幼児・小学生が多く、若者や働き盛り世代はほとんどいないに等しい。それ以外は、50代後半から60代70代となっており、やはり真ん中の世代が抜けている。働き盛り世代の方々のライフスタイルの中に、どのようにスポーツを取りこんでいくかを、私たちも課題にしているが、なかなか難しい。運動したいと思っている方はおられるが、「はじめの第一歩」が難しい。始めたら楽しいので、続けられる方もいる。また、小さいお子さんと一緒に、親子で運動を始めるケースもある。健康や精神的ストレスに対して、運動はいろいろな面でとても刺激になり、リフレッシュできるので皆さんにも取り組んでいただきたい。働き盛り世代の方には、生活習慣病予防にも繋がるので、是非スポーツを続けていただきたい。
- ◎ 働き盛り世代をどのように取り込むかが課題だが、例えば子供がスポーツクラブなどに通っている場合は、保護者もおそらくスポーツに興味があると思うので、送り迎えだけでなく、平日は難しいが、何か一緒に取り組む方法がありそうな気がする。
- 学校部活動の地域移行により、子供は行きたいけれど、保護者の方々から送迎が負担だという声を多く聞く。
- ◎ この施策で障害者スポーツの推進として挙がっているが、障害者スポーツの現状はどうか。
- 障害者スポーツ協会では、19（種目）のスポーツ教室を開催しているが、4つの競技会（水泳・陸上競技・フライングディスク・卓球）も含め、コロナ禍のこの3年間は、参加者が非常に少なかった。（障害者の）施設が、障害者を外に出したがらず、施設の中でも、交流を避けようというのがやはり大きなハードルになった。障害を持った方々もスポーツに取り組んでおられるが、介助が必要で、人との交流が一層多くなることもあり、今後の課題となるのではないか。

- ◎ 障害者と健常者が一緒にスポーツをするという取り組みはあるのか。
- パラスポーツ指導者という資格があり、その方々が障害者のスポーツを支えている。例えば、車椅子バスケットの選手の中には、健常者で元バスケットボールの経験者が、車椅子に乗って実際に試合に出るというケースもある。ボッチャの教室に行くと、お父さんやお母さんが、障害を持っている子供を連れてきて、そこで一緒にボッチャを楽しんでいる光景も見受けられる。障害者だからこのスポーツというとらえ方ではなく、集えば自然に健常者と一緒にできるのではないか。私自身も、教室へ視察に行った際には、一緒に交じって楽しく活動している。
- ◎ まさしくインクルーシブである。今、インクルーシブスポーツがいろいろなところで言われている。分け隔てなく、障害者・健常者、年齢など関係なしにという流れがある。
- 実際に私は現場に行く立場だが、障害者スポーツという名前ではなく、ユニバーサルスポーツ、子供からお年寄りまで、障害のある人もない人も一緒にできるスポーツとして普及していきたいと日頃から思っている。障害者スポーツ自体、健常者ができないわけではないし、また障害者スポーツはいろいろ考えられてできているスポーツなので、そこに健常者を交えるということは全然問題ない。また、新たなスポーツとして、私は、卓球バレーという競技をやっているが、お年寄りからお子さんまで同じテーブルに座って、同じ道具を持ってできるスポーツである。そのようなユニバーサルスポーツを、身近なところで、いつでもできるように、環境を整えていけばいいのではないか。例えばショッピングセンターに行ったらちょっと体験できるとか、子育て世代などは、なかなか時間を確保してスポーツをすることは難しいが、空いた時間に、何かやりたいなと思った時に、ここでこういう行事をやっているから、ちょっと参加してみようと検索できるようなアプリなどがあればいいと思う。
- ◎ 探しやすい、わかりやすいがいい。次の施策の2番のところで、学校体育・スポーツの充実が挙がっていて、体力テストの結果が出ている。私も体力向上推進委員だが、富山県はあまり良い結果が出ていない。やはり運動時間が少なく、特に中学生女子が低い。小学生はまだいいが、中学生に入った途端に点数が上がらなくなる。それはこの委員会でも体力向上推進委員会でも必ず話題になる。体力テストを、そもそも、どのような形で行っているのかも問題である。学校の現場で、教員の指導力の向上や、体育・スポーツ活動の推進とあるが、高校生の体力や部活動はどうか。
- 高校生の体力・運動能力テストの結果自体は、良くも悪くもなっていない。県内の成人のスポーツ実施率は、全国平均から比べたら低い。おそらく、中学校も高校も同じである。体育の授業や部活動を通して、今、何を目標にしているかと言ったら、体力テストでいい点数が出たり、子供たちの体力・運動能力を上げるということはもちろん大事だが、やはり中学校、高校の体育や部活動を通じて、スポーツが好き

になってほしい。生涯的にスポーツを楽しくずっと取り組んでいく人を増やすというのを大きな目標にして、高校は体育活動をしている。体育の授業では、昔はサッカーや陸上競技を全員で行うという形だったが、今は選択（制）の体育（の授業）を多くして、自分の好きな競技を行っている。そういう体育の時間をどの学校も増やしている。例えば、体力・運動能力テストの結果を上げるには、ひたすら体育の時間でその練習をすれば上がると思うが、それが目的ではなくて、それでは体育嫌いになって将来的にスポーツをやらない子も増える。そうではなくて、そういう数字を追っていくのか、それとも、生涯的にスポーツをやる子を増やすという数字を追っていくのか。ちょっと両極端になるが、やり方的にはその2つは少し相反するものがあるんじゃないかと最近は感じている。子供たちは選択体育で、自分の好きな競技に取り組むと、今まで体育が嫌いだったが、卓球なら自分が好きだからやるとか、ダンスならやるといふ子は、実際増えている。そういう気持ちも大事にしてあげたいと、最近、子供たちを見て思っている。

- ◎ 児童生徒体力向上推進委員会でも同じような意見が出ている。選択肢を広げないと子供たちは喜ばない。面白いのは、アンケートをとったら、体力テストの結果は低いけど体育の授業は好きだという子がいる。なぜかという、仲間と一緒に話をして体を動かせるから好きだと。できる・できないではなくて、それとは関係なく、話し合いや友達づくりの場になっている。だから昔のように、体力だけという感じでは子供たちはついてこない。そうすると、今度は指導者の問題が出てきて、どんなスポーツを誰が教えるのかという話になる。部活動の地域移行にも関連してくるが、よくスポーツ少年団が話題になってくる。スポーツ少年団は小学校からやっていって、その後も同じ指導者に教えてもらっている。富山県の中で状況が違うと思うが、スポーツ少年団の現状はどうか。

- 少年団に入っている子供たちや指導者の現状だが、県内のスポーツ少年団の団員数は年々、かなりの数が減ってきている。バスケットボールとサッカーに関しては、スポーツ協会ではなく競技団体の所属になるので、少年団に登録しなくても、クラブで登録することで試合ができるので、その影響もある。少年団に所属している子供たちの体力に関しては、30年ほど前とそんなに変わらずに維持している。スポーツに触れていない、スポーツ少年団に入っていない子供に対しては、全体的に落ちているような感覚がある。ただ、少年団に入らない子の方が多いので、その子供たちを少年団が救えるかである。スポーツ少年団に入るには敷居が高い。スポーツ少年団には、アクティブ・チャイルド・プログラムという委託事業がある。私がそれに関わり始めたのが10年ぐらい前になるが、そこから子供たちの発達を見てきた。私のスポーツ少年団は、競技に特化せずに、子供たちの体力を底上げしたいというところをメインで行っている。様々な遊びをすることで、子供たちのオールラウンドな能力やベースを作っている。ある程度身体が成長するに従って、他の競技に移りたい、もっといろいろな競技を上手にできるようになりたい、という意欲が出てきて、競技に触れていくという子が多数いる。全体的に、子供たちはある一定の年齢、女の子だと8歳ぐらいで、自分は運動が苦手だと、もう駄目なんだというよう

なことを早く決めてしまう。多分、自我の目覚めが早いからという気がするが、そこで駄目だと思わずに取り組んできた子供たちはやっぱり伸びる。5年生や6年生の高学年で少年団に入ってくる子もいるが、そういう子供たちは、興味関心度がとても低い。このままでいくと、全体的に、スポーツを楽しむ人口が減っていくのではないかと危惧している。シニア世代の方々のスポーツ参加率は、とても高い。小さい子供たちは体を動かすことがとても好きで、自分に合った場所を、親が選択してくれるが、なかなか機会に恵まれていないように感じる。学校で体育というと、低学年では運動遊びがとても大事であり、もっと遊びを大事にすることで、自然に子供たちが育っていく。今、子供たちが一緒に集まって、何かをすることが、大人の都合で削られている感じがする。集団で遊ぶことがなくて、10人以上で遊ぶことがない、学校でも遊ばない。そのような環境が子供たちに与えられていない。

- ◎ 小さいときからの身体の動きづくりはとても大事で、その後が決まるようなところがある。我々もそうだったが、スポーツだけでなく遊びが大事。学校でも、始業前や休み時間に遊んでいたというのが今はない。集団で遊ぶことで、社会性などができ上がってくると思うが、今の時代は、スポーツクラブに入ってスポーツをやらなるとなかなかできない。そういう環境づくりを考えないといけない。あともうひとつは体力テストとも関連しているが、最近の子供たちは、昔と比較して確かに体格はいいが、筋肉のつき方や骨格が違っている。そうすると、けがをするところが違ってきているのではないかと思うが、どうか。
- コロナ禍の時に、特殊な「ステイホーム骨折」というものが一時期流行った。安静にした後、急に開放された時に折れるというような、私たちがあまり今まで経験したことのない骨折だった。これに似たようなことが、中学校から高校に進学したとき、急に運動レベルや練習の強度が上がったときや小学校から中学校の部活に入ったり、先輩に厳しい練習を強いられたりしたときに疲労骨折のようなことが起こる。その予防にはやはり日常からの遊びを含めた運動・負荷が大事。今日、私はここまで階段で上がってきたが、そんなことでもいい。そういう運動習慣、身体を動かす習慣づけが大切である。
- ◎ そういうところにも影響がおよんできているのが現状ではないか。次の全国や世界の檜舞台で活躍できる選手の育成、今度はトップの話についてはどうか。
- この基本施策のすべてを見て感じることは、日本のスポーツ界が、従来、学校の部活動や体育の授業を通して子供たちの身体づくりをしていたものが、今、ヨーロッパスタイルに舵を切り始めた過渡期である。私は水球をやっており、子供たちを海外に連れていったことも何回かある。その中で見たヨーロッパスタイルのクラブチームは、どちらかというとサッカーをベースに町づくりをして、子供たちを地域と一緒に育てていく文化である。先程の働き盛り世代をどうスポーツに巻き込むかということにも繋がってくるが、ヨーロッパだと、水球で日本のチームが来たら、家族みんなでプールサイドに来て、おじいちゃんやばーでビールを飲みながら観戦

し、お母さんは、隣のショッピングモールに行ってショッピングし、子供はプールで泳いでいる。そういう全然違う文化を今、日本は取り入れようとしている。その中で、例えば部活動の地域移行をしようとしたときに、先程から問題になっている親の送迎など、課題となって出てくる。この後、プランを作っていく上では、国の舵の切り方、提案の仕方等も当然注視しながら、しっかりと作っていかないと大変なことになるのではないかと思う。体力についても、結局、学校部活動が地域移行すると、やらない子も当然出てくる。保護者が送り迎えできないから、スポーツをしたいけれどやめたということも出てくるし、当然、受益者負担でお金がかかるとなると、参加しない子も出てくる。そうすると、二極化していくと思う。二極化していくと、この資料の7ページにある、体力のデータにおいても、基本的には平成30年度と令和5年度の順位を比較すると、小学生も中学生もあまり変わっていない。しかし、トップの方は体力的に伸びてるかもしれないし、やらない子はどんどん下に落ちていっているかもしれないので、合わせると平均は変わっていないが、中身的には変わっているかもしれない。このようなことも、この後注視していかなければいけない。トップアスリートの檜舞台で頑張る選手というのは、当然がむしやりに自分の目標に向かって取り組んでいるので、そこは今と変わらない。1番の施策でも、県営スポーツ施設の機能の充実等というところで、県総合体育センターの中アリーナにエアコンがついた。暑い中、涼しいところでスポーツができる環境を、しっかりと整えてサポートしてくださっているところは大変ありがたい。この後も継続して、支援していただければありがたい。

- ◎ やはり二極化というのはある。昨日、テニスの杉山愛さんが富山に来ていたが、女子テニスのツアーをやるらしいが、これは、テニス連盟の方で誘致・働きかけがあったのか？

- 県連盟が国際大会の誘致をしてきた。伊達公子さんのプロジェクトで6月中旬に1週間くらいかけて常願寺のコートで国際試合を行うことになっている。今は能登地震でコートが困ったことになっているが。私たち女子テニス連盟は、強化については県協会だが、女子部は婦人のテニスなので、会員が200名ぐらいいる。先程からのいろいろな競技と一緒に、大体10年前ぐらいから、年齢構成がそのまま上がったような状態である。80歳以上の方も何名かおられるし、ほとんどが50歳以上で60歳代が多い感じで、下の方が入っていない構成になっている。今、スポーツの楽しさが、ゲーム（スマホ・PC等）などの楽しさに奪われてしまって負けている感じがする。私の孫は、WebやYouTubeなど、富山県のアプリを見ながら、一生懸命縄跳びしたり、走ったり、ダンスをしたり、家でも運動している。小学2年生だが、グラウンドは熊が出るから外で遊べないし、下校後もまっすぐ家に帰るように指導されて、放課後に全然遊べない。自由に運動するような経験が全然ないと思う。親が働いているので、祖父母がどうにかして運動経験させたいと思って連れまわしている。女子テニス連盟では、幼稚園に出向いてプレーアンドステイという、テニスを体験して楽しんでもらう活動をしている。子供たちが、1回経験して楽しい、やってみようと思ってくれたらと活動している。小さい子供のうちにたくさん

のスポーツ経験をして欲しいと思って活動をしている。

- ◎ 世代を超えていうところがキーポイントでしょうか。
- 私は、専門が陸上競技で、この全国や世界の檜舞台で活躍する選手ということを見ると、富山県内の陸上競技では、大体中学校ぐらいで頭角を現している。何年前に、全中大会の男子リレーで優勝した中学校があり、主力選手は、県外の高校に進学した。今年度、全国中学校駅伝女子で、中学校1年生、2年生が活躍したが、もう県外の有力高校から（スカウトの）声が掛かっている。そう考えると優秀な選手を発掘して、富山県の中に置いておくことはほぼ不可能ではないか、そういう時代になってきているのではないかと感じる。報告資料1のオリンピックを目指す本県有力選手を見ると、富山県出身の選手もいるが、県外から県内の企業にきている選手たちもいる。富山県の選手が全国大会で活躍して富山県民に元気が与えられる。でも、その影響を受けた子供たちが、今度はより良い環境、より良い指導者を求めて、県外に出ていく。非常に寂しいが、これが現実なのかと思う。富山県という小さい県で良い選手がたくさん出ている中で、全てのスポーツ環境が整い、網羅されて、下も育つ、上も育つ、シニアも育つというような、そんな欲張りなことが、この後可能なのかどうなのかということ、今回初めてこの会議に出て感じた。
- ◎ 私も常々思っている。富山県は高校と大学の数が増えないので、そこがネックかなと思う。中学生は本当に優秀で、全国レベルの方が何人もいるが、なかなか県内に残ってくれないというのは、県の方もご存じかと思うが、そのあたりではないか。私の個人的な意見でもあるが、これは知事に動いてもらうしかない気がする。檜舞台での活躍があるホッケーはどうか。
- ホッケーに関しても、小中高校までは富山県で活動する。大学になるとどうしても県外に行かざるをえない。強化やその選手の目指すものを考えると、その進学は間違っていない。逆にその選手たちが、大学卒業後や、実業団で活動し、第一線を退いた後、地元に戻ってきても活躍できる場が今はない。そういうことを踏まえると、セカンドキャリアはとても重要だと感じている。実業団で今やっている選手に関しても、地元に戻ってきたいという気持ちがあるが、就職先がないとよく耳にする。今、JOCが行っている「アスナビ」のような支援制度を作ったり、今は1人1台携帯を持っている時代なので、そのようなアプリを作ったりして、企業とアスリートがマッチングするような制度も取り入れていただきたい。それにより一層、富山県のスポーツが活性化すると思う。あともう一点、少子化により、高校年代でも部員数を確保することができないのが今、大きな課題になっている。ホッケーのライバルの福井県では、県外から選手を集めて強化を図っている。富山県においては、県立高校にホッケー部があるので、県外から部員を確保するのがなかなか難しい状況ではあると思うが、今後そのようなことも考えていかなければならないのではと感じている。

- ◎ 平高校のように全国区から生徒を募集する感じか。そうしないと、なかなか人が集まらない。5番目のスポーツによる地域の活性化はいろいろなところで聞く。プロスポーツでの活性化や富山マラソンでというのもあるが、この辺りのご意見はいかがか。実際にご自身の住まわられてる所でこんなもので盛り上がっているなど、何かあるか。
- 砺波市では、去年、バレーボール男子（日本代表）が合宿を行い、練習や中国との交流試合をしたが、全国から来た観客が、駅からシャトルバスに乗って会場まで移動するなど、とても町が盛り上がった。これも継続性が問題で、バレーボール協会では何年かごとにこれをやってみたいとのことだった。
- 地域活性化と言われたときに、スポーツで地域貢献というものに移っているような気がする。私は北陸電力出身だが、北陸電力でも、今はカタールになったがアローズというチームを持っていた。あと、バスケットボールは石川県で、福井県には、ハンドボールというように、会社でチームを持っていた。そうしたスポーツ採用をした時の、会社の中での選手の立場はなかなか難しい部分があった。チームを外部へ出して、今度はそこへスポンサーとして入っていく方が、企業とすれば取り組みやすい。カタールやグラウジーズだけでなく、いろいろなプロスポーツチームへ、企業の方にスポンサーとして参画を求めて、活性化しながら、さらに地域貢献につなげる方法がないのかと思っている。
- ◎ 直接というわけではない。チームに対して協賛する形かなと思う。県外学生のスポーツ合宿の誘致というのは、増えているのか。
- ◆ 大きく増えているという状況にはない。このことについては、スポーツコミッションの設立に向けた検討という中で、本県のスポーツ資源・ハード的なものや自然（環境）なども含めて、今あるものを使いながら本県の可能性や、どういう取り組みができるのか、来年度、調査研究したいと考えている。そういう中で、スポーツ合宿もその中のひとつとして考えている。

5 その他 組織改編について

- ◆ 新年度から、県では、スポーツ振興課に「スポーツ環境魅力向上担当」を新設することになった。新年度予算の中で説明した、県総合運動公園の魅力向上、周辺エリアのスポーツによる地域活性化などについて担当する。
委員の皆様には、引き続き、本県スポーツの振興にご協力をお願いしたい。
- スポーツコミッションという言葉が初めて出てきたような気がする。これからのスポーツ戦略、スポーツの環境を大きく魅力的なものに変えていくために、これが出てくるだろうと想像する。今後ヨーロッパ型にスイッチしていく、環境が変わって

いくのではないかという中で、ヨーロッパの環境だと、大企業が必ず地域のスポーツクラブのバックアップをしている。例えば、スポーツ少年団日独同時交流のようなものがあつた時には、それぞれのクラブに、滞在の間、移動のための大きなバスが提供される。バックアップの部分で、大企業が必ず絡んでくる。スポーツはお金がかからない、教える人はボランティアが当然だったが、経済界が関わり、バックアップしてしていただくことで、お金が動く。そういう環境整備が行われるのか。

◆ スポーツコミッション自体は、行政・スポーツ関係団体・企業、合宿であれば観光なども想定し、そういう団体の方々に、一緒に協議の場に入っていて、形作っていくことを、今のところは想定している。まだ全く形にできあがったものではないが、行政だけ、スポーツ団体だけではなく、いろいろな別の立場の方々にも入っていて、進めていきたい。

◎ 例えば、こういう会議の場に企業の方も入っていただくとか。

◆ プロスポーツチーム関係というようなことも当然ある。観光面というような話もある。

◎ より、いろいろな分野から人を集めてという形。

○ 先ほどエアコンの整備という話が出てきたが、実際使うにあたり、県総合体育センターの大アリーナを1時間借りたら1万6030円かかる。それを1日使うと10万円ほどになる。使用料は大体2万円前後なのに、それは、アマチュア団体はなかなか払えない金額だと思う。同等の県西部体育センターは、1時間3660円である。電気料は変わらないのに、何でこんなに違うのかなと思っている団体が多い。利用料についても検討していただきたい。減免についても富山市の場合で使用料の50%、県の団体でも30%になる。暑い日が続く中で、健康面も考えたら、設備の改善だけでなく、使用料や減免についても考えていただきたい。

◎ この場では即答できないと思うので、よくご配慮いただければ。

県におかれてましては、これらのご意見やご提言等を県のスポーツプランの改定に、活かしていただきたい。また、委員の皆様方には、今後とも本県スポーツ並びに学校体育の推進にご尽力賜るようお願いしたい。

6 閉 会